

地域福祉のキーパーソン「SC」と 利用者のリアルなニーズを満たす

地域の多様な主体による生活支援・介護予防の体制整備の一端を担う生活支援コーディネーター（以下、SC）。ケアマネジャー（以下、ケアマネ）を含む様々な地域住民、そして行政と連携することで、個別ニーズと地域資源のマッチングや、地域ニーズの把握による社会資源の開発等、ミクロからメゾ、ひいてはマクロレベルでの支援へと拡大が期待できる。一方、特集冒頭のアンケート調査（P.13-14）では、SCと連携しているケアマネは15%程度に止まっている。そこで、埼玉県坂戸市で活動するケアマネとSCに、活動内容と連携の実際を聞き、実践でのヒントを探った。

リアルと本音はインフォーマルにあり ケアプランに地域資源を組み入れるメリット

——社会資源をケアプランに取り入れるうえで、地域住民と多く関わり、地域の情報を多く持っているSCとの連携は欠かせなくなりそうです。そもそもケアプランに地域資源を取り入れると、どのようなメリットがありますか？

松本 「本物」の体験ができるのが、地域資源だと思います。介護保険のサービスはルールが決められているので、どうしても「疑似的」な体験になりがちです。例えば、スナックでカラオケを楽しむのと、デイサービスでカラオケをするのでは、まったく違う体験だと思うんです。長期目標を、ただ「カラオケを楽しむ」とするのと、「馴染みのスナックでカラオケを楽しむ」とするのでは、本人のやる気が全く違います。もちろん、利用者のニーズとマッチングできていることが前提

になるので、ミスマッチを防ぐために、それまでの生活や嗜好などを対話によって聞き取るのが重要です。私は、過去から今へと順に聞いていくのではなく、今から過去へと遡る聞き方をよくしています。例えば買い物だと、「ご自宅の近くにコンビニがありますが、最近までよく行っていましたか？」→「うん、よく行ってたよ」→「コンビニで売っていないものはどこに買いに行っていましたか？」→「少し前は車を運転してスーパーに行くのが楽しみだったんだよ」というようにです。長期目標に、よく行っていたスーパーに買い物に行くことを設定すると、日常的にやっていたことだから、それができる自信に繋がります。リアルな体験だからですね。

細貝 身寄りのない方や働いている家族が増加し、これまで家族が担っていた部分が介護保険ではサポートできないことが多く、その部分をケアマネのシャドーワークや地域包括支援センター（以下、地域包括）の業務でカバーしているのが現状です。そのような、介護保険が担えない部分を地域資源にマッチングできれば負担軽減にもなりますし、地域の人々が住み慣れた場所で長く暮らせる体制づくりになると思います。人それぞれニーズも生活環境も違うので、すべてを介護保険でカバーするのは難しいですね。

林 私は以前、居宅のケアマネをしていて、新米だった時



取材協力 ▶（左から）

細貝 亮さん（SC）

坂戸市中央第三地域包括支援センター センター長 社会福祉士、主任介護支援専門員

松本正人さん（ケアマネ）

社会福祉法人久壽会 ケアプラン好日の家 法人本部長 主任介護支援専門員

林 吉郎さん（SC）

坂戸市東部地域包括支援センター 主任介護支援専門員、社会福祉士

●生活支援コーディネーター（SC）

「高齢者の生活支援・介護予防サービスの体制整備を推進していくことを目的とし、地域において、生活支援・介護予防サービスの提供体制の構築に向けたコーディネート機能（主に資源開発やネットワーク構築の機能）を果たす者」と位置付けられ[※]、（A）資源開発、（B）ネットワーク構築、（C）ニーズと取組のマッチングという3つの機能を担っている。地域支援事業の生活支援体制整備事業として、SCの配置と協議体の設置等の充実が進められている。
※厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業のガイドライン」